

特 115

131

紙手と字習ンペ



始



物 115
131

富田岳鳳編書

ペン習字と手紙

大阪岡本増進堂藏版

大正
12.7.14
内交



ペン習字と手紙

目次

書簡文用語

- 一 往信起筆用語
- 一 返信起筆用語
- 一 時候用語 一月

頁 一 三 六



一、 一、 一、 一、 一、 一、
〃 〃 〃 〃 〃 〃

結
尾
語

十二月 十一月 十月 九月 八月

三 二 二 二 二 二
〇 八 六 四 二 〇

一、 一、 一、 一、 一、 一、
〃 〃 〃 〃 〃 〃

七月 六月 五月 四月 三月 二月

一 一 一 一 一 一
八 六 四 三 一 八

書簡文

- 一、寒中見まへ
- 一、右 返 事
- 一、火事見舞
- 一、右 返 事
- 一、寫眞を送る

三三
三五
三七
三八
四一

- 一、國産を贈る
- 一、返 事
- 一、郷食應を謝す
- 一、世話になりしを謝す
- 一、杉葉狩に誘ふ
- 一、返 事

四五
四九
五二
五三
五八
六〇

一、青年前方に友を招く

六二

一、返 事

六五

一、精進を執す

六六

一、入道すも友へ

六九

一、入道者より友へ

七三

一、おまじを借り

七八

一、おまじを乞ふ

八三

一、友を紹介す

八五

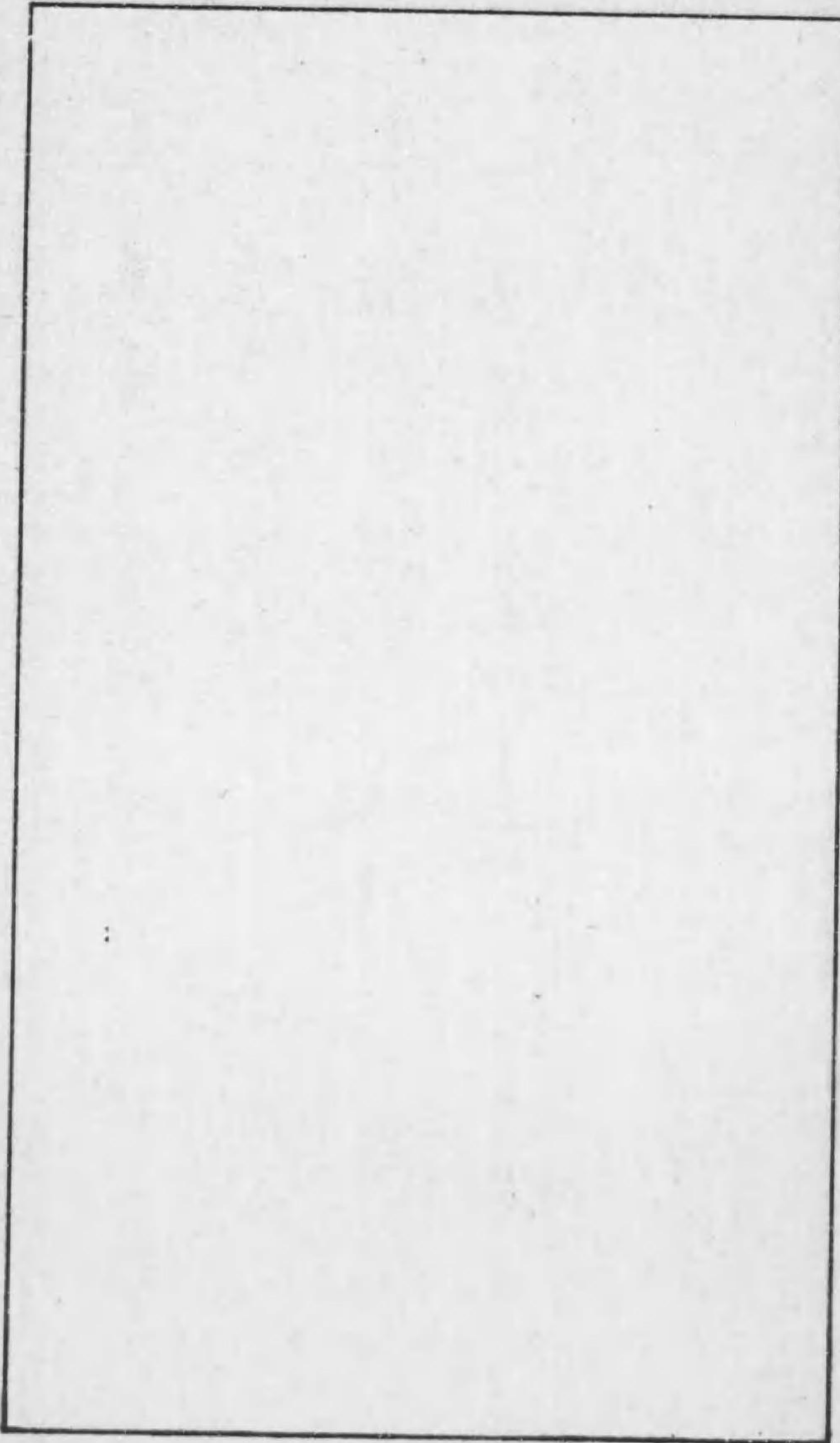
一、友の不身持を戒む

八八

一、忠告を受けし友へ

九七

以上



書簡文用語

往信起筆用語

拜啓。お成。拝啓。謹啓。

謹啓。活成。肅啓。由成。

拜呈。お呈。謹呈。謹呈。

一筆啓上。一筆啓上。一筆
 示し上げ候。一筆示し上げ候。
 手紙を以て申し上げ候。手紙
 を以て申し上げ候。前略。あ
 略。略啓。畧啓。省冠。少

哥

拜復。返信起筆用語
 復啓。復啓。肅答。由答。
 御手紙拜見仕り候。

少成おらん侍り也。貴書
 拜讀仕候。考書お侍り候。
 御芳墨拜受仕候。ソサ
 書お交はせ。尊翰披見
 考福披見。華墨拜誦

華墨お誦。玉章に預り。
 玉字に預り。及雪有難く
 及や難あり。御懇心書承り候。
 考書お侍り候。御來論の旨
 委細拝義仕り候。

寒中とは申し乍ら昨今の
寒さはまた一入に候。
室中も申ししむら
の寒さはまた一入に候

二月

春寒料峭の候。まろき料
峭は。餘寒實に凌ぎ難く
餘雪を室に凌ぎ難く。残雪
未だ消えず。申さず。強
かゆらや。

餘寒殊の外嚴しく。餘雪
 殊しく少く。黄鳥
 春信を齎らう。若くは
 信を齎らう。紅梅二三
 種。やく笑を合み候。

紅梅二三種やく笑
 合み候。

三月
 漸く春めき申候。漸く
 春めき候。春色相

催し。春の色あはれ。
春暖の候に相向ひ候。

春暖し候にあ向ひ候。
柳の糸も浅緑に染めはじむ
柳の糸も沙洲に染りけり

四月 春暖の候。春暖し候。
清和の候。清和の候。
百花爛漫の候。百花爛漫の候。
春色駘蕩の候。

春色は遊蕩の候。春宵
一刻値千金の候。春色
一刻値千金の候。

五月

薄暑相催し。薄暑相催し。

向暑の砌。向暑の砌。
新緑鮮やかなる頃と相成候。
新緑鮮やかなる頃と相成候。
一雨毎に早苗の場へ行か
相見え候。一雨毎に早苗

の場バリー〜やうおらんま

六月
梅雨の候、梅雨〜候。

梅雨鬱陶〜梅雨鬱鬱

頃〜連日の梅雨には心迄も

腐る様見え候。蓮子の梅

雨霖雨漸〜霽れす〜

相見え候。あま〜

雲の影〜

〜

七月
暑氣日に増し暮り候。日長
日増し暑かり候。炎暑甚だしく
夕涼風あり候。緑翠
滴る計り。深更清き計り

涼蔭讀書の好期。涼
涼書の好期。炎熱堪へ難
矣。熱堪へ難。炎暑酷
殆ど釜中にあるの想ひ致し候。
涼風あり候。涼風あり候。

にあつたのあつたは

八月

炎帝猛威を逞しくする候。

炎帝一猛威を逞しくする候。

酷暑の候。酷暑此れ候。

極暑の候。極暑候。

一夕立あつたは熱生せんものをと

徒に空のひ打眺め。一夕を

あつたは熱生せんものを懐に

空のみお眺め。

驟雨一掃苦熱を洗い去り
 漸く蘇生の思ひ致して候。
 涼く一掃苦熱を洗い去り
 漸く蘇生の思ひ致して候。

九月

残暑甚だしく。秋の涼気
 暑氣今に去り兼ね。長
 今に去り兼ね。朝夕は冷
 を覺え候。秋の涼気
 今に去り兼ね。朝夕は冷
 暑氣今に去り兼ね。長

の初。漸く秋冷の候と相成
候。漸く秋冷の候と相成
も双。

十月

何となく秋めきて候。何となく

秋めきて候。天高く馬肥ゆ
るの時。とうとう秋の候。
燈火親しく可きの時。海
解しづるの時。梧葉風無きに
散りて秋を告げ候。梧葉あはれ

冬にあたりて、林をきりぬ。

十月
向寒の節。向寒し節。

寒冷相催し候。き次お

候。俄に冷氣をおぼる

候に冷氣をおぼる。竹離の
菊花芳香を放つ候。露の
菊の花芽をむらう候。
今朝は一面の霜にて雪かと疑
はれ候。今朝は一面の霧

しとふと終りしを。

十二月

極寒の候。極寒は候。

江寒の候。江寒は候。

寒氣彌々甚だしく。寒氣

海一ちが。月日に関
守なくいつしか年の暮と相成候。
月日に寒きなりし。年の
暮と相成候。年末の御多し
御案内申上げ候。年末の

幸^{さい}才^{さい}と^と幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を
 幸^{さい}に^に頑^{けん}健^{けん}を^を

まごに お月たに うんち

火事見舞

揮

今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を
 今^{いま}の^の新^{しん}ゆ^ゆを^を

一 所 名 其 記 載 十
 洋 細 知 一 一 一 一
 貴 毛 是 如 河 一 一 一 一
 飯 急 事 法 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一

右 五 子

早 一 一 一 一 一 一 一 一
 有 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一

わがはるはるの山に
 紙をよき紙知はりし
 一の程寫生いふ描りしは
 成ふくもく見せしものきと
 その情書も息も保つて
 二

海す
 顔は寛く頬骨高
 顔の特徴を表し
 常に眉目しめを
 様心掛けよと申され
 三

不^ふ外^{がい} なるべ^{なるべ}け^け仕^し儀^ぎも^も面^{めん}白^{しろ}
 上^{かみ}下^{かみ} 儀^ぎお^お互^{たがひ}様^{さま}に^に承^{うけたま}い^な
 少^{せう}多^たの^の御^ご 里^りは^は餘^{あま}り^りお^お話^{はな}
 いた^{いた} 通^{とほ}り^りち^ち物^{もの}噂^{うわさ}と
 悔^{くわい}心^{しん}と^と分^{ぶん}魚^{ぎよ}と^と白^{しろ}魚^{ぎよ} 物^{もの}

其^{その}中^{ちゆう} 夫^{おとこ}婦^{めかけ} 儀^ぎも^も承^{うけたま}い^な
 考^{かう}造^{ぞう}りの^の仕^し様^{やう} ち^ち悔^{くわい}心^{しん}な^な餘^{あま}
 り^りに^に有^あり^りあ^あし^し 公^{こう}魚^{ぎよ}は^はお^お話^{はな}と^と一^{いつ}通^{とほ}
 写^{うつ}し^した^たに^に 殊^{こと}に^に 白^{しろ}魚^{ぎよ}の^のみ^みが^がと^とん^んて
 以^{もつ}て^て 御^ご 二^にお^お周^{しゆう} 自^じ慢^{まん}も^も 承^{うけたま}い^な

申すべしやーとてやへんやー
 此程少くは道便に托
 教道は月ならん申すにこそ
 此等如きといはれ 幸しふは

返事

美事ながら「白魚」一鉢に
 好物なる一敷多しは魚興にあつ
 りかり「石」は
 自慢「親族」知「了」め
 親「福」かけ「山」大

大に御目にかへりて
 其の後の法多しゆれにつまらぬ
 海で暮るるに勝る同く
 仰るへははたは
 静か

御長 應を謝す

南の昨日は、
 以て御書の末に、
 お子存あきま、
 赤けな一、

お砂一
 昨日は、夕暮りも及ばぬ
 池に、あづき、花を、挿し
 まつり、花の、法、の、坂、路、が、大、抵
 ち、又、ま、な、り、ん、と、高、か、推、つ、た、の

身、は、流、り、下、り、自、然、車
 舟、の、心、を、置、いた、位、な、は
 ま、だ、も、な、り、し、彼、れ、が、如、き
 為、神、ハ、と、思、ひ、あ、つ、り、も、な、く、振、り
 海、に、た、ま、し、の、ま、ま、の、海、の

車は却て夢の中
 海は如くおぼろ
 抱はれし心は
 悔はれし心は
 一刻は減らず
 標はあつた
 おぼろの心

其の由は杖に
 糸は中へ
 海は中へ
 のこはまじ申
 女

松茸狩に誘ふ

啓

今朝吉田君が定この出曜

うら日曜にかけ、松茸狩に

出掛けよと誘決政

君と餘り上子な才はこれだ
か手計横好きは分知のり家
如何に同りせや如場所は山
より解らる松茸或は子銀と
要する知のみ海を渡らる

暢2氣きなな約やく巾きん小せうとと一一たたののたたと
 けけ〜
 我え腫かみ〜
 侍こま了り了り
 了り了り
 早はや〜

青年海力に友を招く

明あ後ご二に十じ以い愛あい宕たう神しん法ぽう法ぽう

海う繁はん餘よ真ま〜
 海うはは様やう如に儀ぎ〜
 力り支しのの身み勢せい直ち々々のの末まつ浪なみととの
 子このの身み勢せいををソソけけらら好か海かい遊ゆう遊ゆう
 はは續つくく事じ埒ら如に何かななもも勇ゆう力り支しのの

りのりありがたく厚くは州
 中ツゲは
 新解と申さば昔の唐紙
 漢國をえんは酷いとゆき
 及び好まざるのいさをるあ

筆居は手にあらずしつ
 筆のたふは夏ふのあなま
 筆のたふは夏ふのあなま

及あまげれたのだつね常つね一いつ有あ傷けがい
 ぢいぢい海うみ跡あと一いつニに三さんつああしし
 救きう一いつつたつた今いま日ひ一いつそそ如いいいん
 ももははししかかたたののぢぢいいととそそそそ断つつ
 事こと一いつ生せいままぬぬつつらら物ものだだらら

出でててくくことことなならら都と府ふ屋や々々
 ややりりたたりりとと思おもひひああらら今いま一いつああららいいままはは
 とと書かいいそそろろろろああららいいままははいいままははいいままはは
 勿し論ろんああらら一いつ週しゅう百ひゃく計けいししりりしし
 いいつつここににああららいいままははいいままははいいままはは

友の不身持を戒む

(廿四日注書)

揮成

この様地より

近事河の面白

あはれいしうかきそは
聊濁きりれ
にちやしゆしやく

と
おは
都
律
首
枚
終
球

極のりれゆ
如何なる
は

春 はる いろ いろ や や 暮 く る る ま ま じ じ り り の の 白 しろ
 街 まち の の 曲 まがり 角 かど の の 接 つ 手 て 事 こと 白 しろ
 に に 下 した 月 つき に に 無 な 時 とき は は 面 めん 交 あ
 の の 柳 やなぎ に に は は ら ら ん らん 又 また ハ ハ イ ハイ ン ン ン ン
 鳥 とり の の 足 あし の の 方 かた も も や や あ あ り り 一 一 一 一

春 はる 霞 かすみ 下 した 月 つき に に 無 な 時 とき は は 面 めん 交 あ
 の の 柳 やなぎ に に は は ら ら ん らん 又 また ハ ハ イ ハイ ン ン ン ン
 鳥 とり の の 足 あし の の 方 かた も も や や あ あ り り 一 一 一 一
 街 まち の の 曲 まがり 角 かど の の 接 つ 手 て 事 こと 白 しろ
 に に 下 した 月 つき に に 無 な 時 とき は は 面 めん 交 あ
 の の 柳 やなぎ に に は は ら ら ん らん 又 また ハ ハ イ ハイ ン ン ン ン
 鳥 とり の の 足 あし の の 方 かた も も や や あ あ り り 一 一 一 一

者^しと^のは^こと^なり^て一^こん^のま^りに^しか^し
 才^さ分^{ぶん}然^{ぜん}ら^のは^あん^のみ^か
 校^は増^{ぞう}の^ちか^の水^{みづ}は^りに^しん^の
 校^が増^ませ^らる^る子^こは^いか^の河^か
 一^こん^のま^りに^しか^し
 才^さ分^{ぶん}然^{ぜん}ら^のは^あん^のみ^か
 校^は増^{ぞう}の^ちか^の水^{みづ}は^りに^しん^の
 校^が増^ませ^らる^る子^こは^いか^の河^か

日^ひの^かが^くの^しん^の望^{ぼう}に^まり^てゆ^いん^に
 思^{おも}ひ^の心^{こころ}は^あん^のみ^か
 一^こん^のま^りに^しか^し
 才^さ分^{ぶん}然^{ぜん}ら^のは^あん^のみ^か
 校^は増^{ぞう}の^ちか^の水^{みづ}は^りに^しん^の
 校^が増^ませ^らる^る子^こは^いか^の河^か

おんこころあし
 遠く弱き次第にわはすめ
 心けん魂をたもて世に
 男牛と生れ修つるまは
 るまごも物をいへん
 のきあひたうまは
 叶はす海に

遠くあしあはばあし
 心けん魂をたもて世に
 男牛と生れ修つるまは
 るまごも物をいへん
 のきあひたうまは
 叶はす海に

かねてより
 先生に習字を
 習はせていただき
 誠にありがとうございます
 先生の手紙を
 拝見し、大変
 励みになります
 先生の指導
 のおかげで
 習字が少し
 進歩しました
 先生に感謝
 の気持ちで
 習字を続け
 たいと思います
 先生のご指導
 を大切に
 させていただきます
 先生のご指導
 を大切に
 させていただきます
 先生のご指導
 を大切に
 させていただきます

大正十二年七月五日
 大正十二年七月十日
 発行



定送 價七拾七錢
 不許複製
 復製 錢拾六
 大政 治 館
 玉 鳴

發行所 岡本増進堂
 大阪市南區北段屋町四九
 電話南四一三二番
 振替大阪大四九番

290
429

終